家のような島

港での魚の量り売り

僕らの質問に親切に応えてくれる島の人たち

豪華な海鮮バーベキュー

家島という名の起こりは、神武天皇が西国から大和を目指す航海の途中、風波を避けてこの島の港に入ったことに由来するとされる。そこは穏やかな入り江で、「まるで家の中に居るようだ」と言われたことから「家島」と呼ばれるようになった。瀬戸内海の東、播磨灘に位置する島々は、「家」という名がついていることで、京から大宰府へ、さらに遠くの国々へと往き通う人々には懐かしく、切ない思いで沖から眺め、漕ぎ寄る地となった・・・。現在の家島を訪れてみても「まるで家の中に居るような」感覚を受ける。しかもそれは由来にあるような「穏やかな入り江」だけの話ではない。僕らが港に降り立つと、そこでは魚の量り売りをしていて、魚を買いに来た家島の人たちはみんなザルを持っていた。僕らにとっては台所用品以外に考えられなかったザルはまるで買物カゴのように見えた。集落へ足を運ぶと迷路のような路地が網の目のように広がる。そこでは僕らが「家の中だけにある」と思っていたものをたくさん目にすることができる。道を尋ねようと島の人たちに声をかけると、外から来た僕らに対しても親切に話をしてくれる。屋外に置かれた椅子や階段に腰をかけ、近所の人と世間話をすることは家島の日常の風景のようだ。食事の際には家島の人たちは僕らを壮大にもてなしてくれた。知り合いの漁師さんに呼びかけて食材を持ち寄った海鮮バーベキューだ。網の上に並ぶのは丸ごとの鯛、イカ、エビ、サザエなど近海で漁れる豊富な海の幸の数々。まさに家島は「家のような島」である。

ウチ、ソトの意識

家島は文字どおり周りを海に囲まれた島である。家島の人たちにとって海岸線は「ウチ」と「ソト」を分ける境界として強く認識されている。また、急峻な斜面に家々が貼りついた集落は細い路地が巡り、どこか親密な雰囲気を醸し出している。このような理由からも家島の地に入ればそれは屋外であっても「ウチ」の意識が生まれるのだろう。また、この意識は屋外空間の「使い方」にも現われている。「家の中のものが外にもある現象」だけではなく、家島の人たちの移動手段を通してもそれを見ることができる。坂の多い家島での主要な移動手段は原動機付き自転車だ。だからこの「原付」は家島の至るところで目にすることができる。それらを見て気づくことは様々な「装置」が取り付けられていることである。例えば釣り好きの人が乗る原付には釣竿を運ぶための筒状の収納具が取り付けられている。「釣竿入れ」だけでなく、家島で目にする原付は、まるで「家の中にあるもの」のようにその主の好みや用途によって手が加えられている。さらに、これらの原付が走る路地空間も手が加えられている。路地の坂道の多くは階段で構成されているが、原付が通るルートを確保するために「スロープ」を併設している所がたくさんある。この「スロープ」はもとあった階段の何割かを後から埋めたようなものが多い。家島の人たちは自分たちの生活に合わせた「屋外空間の手の加え方」に非常に長けているといえるのではないだろうか。これはまさに屋外空間を「自分たちの場所」だと認識しているからだといえる。

家島では原付が主な交通手段

釣竿を運ぶための筒状の収納具

原付が通れるように階段に併設されたスロープ